



パフォーマンス監視の基本設定

AdRem NetCrunch 10 参考資料

パフォーマンス監視の基本設定

NetCrunch は AdRem Software が開発し所有する監視ソフトウェアである。
株式会社情報工房は日本における総販売代理店である。

©2018 Johokobo, Inc.

目次

1. パフォーマンス監視の概要	1
2. パフォーマンスの監視方法	1
2.1. SNMP 監視の設定	1
2.2. OS 監視の設定	1
3. パフォーマンスカウンタのしきい値違反イベント	2
3.1. パフォーマンスカウンタのしきい値違反イベントの定義	2
3.2. イベント条件の設定	3
4. パフォーマンスビュー	3
4.1. パフォーマンスビューの設定	3
5. トレンドビューア	4
5.1. トレンドビューアの使用方法	4
6. レポート	5
6.1. レポートの設定方法	5
6.2. レポートビューア	6
7. 仮想パフォーマンスカウンタ	6
7.1. 仮想パフォーマンスカウンタの定義	6
7.2. 仮想パフォーマンスカウンタの使用方法	7

1. パフォーマンス監視の概要

本資料では、AdRem NetCrunch 10.1.1.4228 日本語版(以下 10)におけるパフォーマンス監視について、一般的に利用される基本的な設定を記載します。ご利用の NetCrunch のビルド番号が異なると、仕様の変更により動作や設定などが異なる場合がございます。あらかじめご了承ください。

2. パフォーマンスの監視方法

NetCrunch では、SNMP 監視や一部 OS (Windows、Linux、BSD、Mac OS X、VMware ESX/ESXi、Solaris) へのエージェントレス監視機能を使用して、パフォーマンスの監視を行うことができます。

2.1. SNMP 監視の設定

SNMP 監視の設定手順を以下に例示します。

1. ノードを右クリック→[ノードの設定]を選択します。
2. 新しく開いたウィンドウの[監視]タブの[SNMP]の項目の右端にて[有効化]をクリックします。
※[有効化]が表示されていない場合は、すでに SNMP 監視が有効化されております。
3. [SNMP]の項目に右端にある歯車のアイコンをクリックします。
4. [SNMP]ウィンドウにて[SNMP プロフィール]などを設定の上、[保存]をクリックします。

手順[4.]の[SNMP]ウィンドウの左上の時間は、SNMP 監視の間隔を示しています。また、ストップウォッチのアイコンをクリックすると、SNMP 監視を無効化できます。

SNMP プロフィールは、メインメニュー→[監視]→[SNMP コミュニティとパスワード]にて編集することができます。

2.2. OS 監視の設定

OS 監視は、NetCrunch に対象 OS (Windows、Linux、BSD、Mac OS X、VMware ESX/ESXi、Solaris) の認証情報を設定することで、エージェントを使用せずに監視対象からパフォーマンスなどのデータを収集する機能です。Windows 監視については、別紙『NetCrunch の WINDOWS 監視 ドキュメント』をあわせてご参照ください。

OS 監視の設定手順を以下に例示します。

1. ノードを右クリック→[ノードの設定]を選択します。

2. 新しく開いたウィンドウの[監視]タブの[OS 監視]の項目の右端にて[有効化]をクリックし、対象の OS を選択します。
※[OS 監視]の項目がなく、[Windows]などが表示されている場合は、すでに OS 監視が有効化されております。
3. 各 OS の項目に右端にある歯車のアイコンをクリックします。
4. 新しく開いたウィンドウにて[認証プロフィール]などを設定の上、[保存]をクリックします。

手順[3.]のウィンドウの左上の時間は、OS 監視の間隔を示しています。また、ストップウォッチのアイコンをクリックすると、OS 監視を無効化できます。

認証プロフィールは、メインメニュー→[監視]→[認証情報マネージャー]にて編集することができます。

3. パフォーマンスカウンタのしきい値違反イベント

パフォーマンスカウンタから取得した値によってアラートを生成したい場合には、パフォーマンスカウンタのしきい値違反イベントを利用できます。

3.1. パフォーマンスカウンタのしきい値違反イベントの定義

イベントの定義方法について以下に例示します。

以下の手順では例として、新たに作成した監視パックに対してイベントを追加しておりますが、ノードやマップ、自動監視パックにイベントを追加することも可能です。また、既存の監視パックを編集することも可能です。

1. メインメニュー→[監視]→[監視パック&ポリシー]を選択します。
2. [NetCrunch アラート&レポートの設定]ウィンドウの[監視パック]タブにて、[新しい監視パック]をクリックします。
3. [アラート&レポート設定の作成]ウィンドウにて、[監視パック]をクリックします。
4. [監視パックの設定]ウィンドウの[アラート&レポート]タブにて、[アラートの追加]をクリックします。
5. [監視イベントの追加]ウィンドウの各タブから、[新しい***パフォーマンスカウンタのイベント]をダブルクリックします。
※「***」には Windows や SNMP が入ります。
6. [アラートルール]ウィンドウにて必要に応じて設定を行い、[OK]をクリックします。
7. [監視パックの設定]ウィンドウの[割り当て]タブにて、[ノードの追加]をクリックします。
8. [ポリシーにノードの追加]ウィンドウにて、監視パックを割り当てるノードを選択し、[OK]をクリックします。
※Ctrl キーや Shift キーを利用して、ノードを複数選択することも可能です。
9. [監視パックの設定]ウィンドウにて、監視パックの名前やイベントに対するアラートアクションなど、必要に応じて設定します。

手順[6.]では、<カウンタの選択>にて監視するカウンタを設定します。SNMP 監視の場合は、OID とインスタンスを手動にて入力するか、MIB データベースから選択することが可能です。また、定義済みカウンタでは、ソースノードを指定し、[仮想パフォーマンスカウンタ](#)など NetCrunch 上に定義されているカウンタを使用できます。OS 監視の場合は、ソースノードを指定するとカウンタ、インスタンスが表示されます。表示された中からカウンタ、インスタンスを指定します。

3.2. イベント条件の設定

パフォーマンスカウンタのしきい値違反イベントを定義する際、イベント条件の項目にてイベントを生成する条件を設定します。新たにイベントを設定する際、デフォルトの条件タイプは[しきい値]となっていますが、プルダウンメニューから変更することが可能です。

条件タイプは以下のとおりです。

条件タイプ	説明
しきい値	指定の値より大きい/小さい値を取得した場合にイベントを生成
予期せぬ変化	直近の平均値と前回の平均値の差分が指定の値より大きい場合にイベントを生成
ベースラインしきい値	取得した値がベースラインに比べて大きい場合にイベントを生成 ベースラインは、1 週間前の 1 日のデータの 6 時間ごと(0:00-5:59、6:00-11:59、12:00-18:59、18:00-23:59)の平均値を算出して自動的に設定
状態の変化	指定の値から指定の値に変化した場合にイベントを生成
状態	取得した値が指定の値に一致/不一致の場合にイベントを生成
存在	値が存在する/存在しない場合にイベントを生成
値の変化	直近の値と前回の値による差分によってイベントを生成 値が大きい/小さい/一致/不一致を選択
範囲	範囲内/範囲外の値を取得した場合にイベントを生成

4. パフォーマンスビュー

カウンタから値を収集したい場合や推移を表示したい場合には、パフォーマンスビューを利用できます。パフォーマンスビューにカウンタを設定することで、対象のカウンタから値を収集して保存します。また、収集した値をパネルに表示します。

パネルの表示タイプには、チャート、バー、ゲージの 3 種類があります。チャートでは直近 60 プロット分の値の推移を表示し、バー、ゲージでは直近の値のみ表示します。

4.1. パフォーマンスビューの設定

パフォーマンスビューの設定方法について、以下に例示します。

以下の手順では例として、新規にパフォーマンスビューを作成しておりますが、既存のパフォーマンスビューを編集することも可能です。

1. [アトラスマップ](コンソールの左ペインのツリービュー)にある[パフォーマンスビュー]を右クリック→[新規作成]→[チャートビュー]を選択します。
2. [新しいチャートビューの作成]ウィンドウにて、[白紙チャートビュー]をクリックします。
3. 作成されたパフォーマンスビューの画面上を右クリック→[新規作成]→[チャート]をクリックします。
4. [パフォーマンスパネルの追加]ウィンドウにて[NetCrunch サーバーデータ]または[ノード]を選択し、[次へ]をクリックします。
5. [カウンタの追加]から任意のカウンタを追加の上、[OK]をクリックします。

他のパフォーマンスビューやイベント、レポートに定義しているカウンタをパフォーマンスビューに追加した場合、既に値の収集が行われているため、パネルには収集済みの値がプロットされます。未定義の場合は、追加した時点から値の収集が始まります。

パフォーマンスビューのパネルに表示されていない過去の値を参照したい場合には、トレンドビューアを利用できます。パフォーマンスビューのパネルを右クリック→[トレンドビューアに表示]を選択しますと、トレンドビューアが起動し、対象のカウンタで収集した過去のデータが表示されます。

5.トレンドビューア

トレンドビューアは、NetCrunch が収集した過去の値を表示する機能です。トレンドビューアでは対象のカウンタから値の収集は行わず、パフォーマンスビューなどで収集した過去の値を表示します。

5.1.トレンドビューアの使用方法

トレンドビューアは、以下の手順にて利用できます。

1. メインメニュー→[ツール]→[トレンドビューア]を選択します。
2. [NetCrunchトレンドビューア]ウィンドウにて[トレンドの追加]から表示するカウンタを追加します。

トレンドビューアでは、日単位、週単位、月単位といった表示単位や、チャート、テーブルの表示形式を切り替えて値を表示することが可能です。また、[ファイル]→[エクスポート]から表示している値をテーブル形式でファイルに出力することも可能です。

6. レポート

収集した値からレポートを作成し、PDF ファイルのレポートを定期的にメールで送信することができます。また、NetCrunch の画面上にてレポートを表示することができます。

6.1. レポートの設定方法

レポートを送信するためには、通知先にメールアドレスを設定した NetCrunch のユーザーを指定します。ユーザーを作成する手順は以下のとおりです。

1. メインメニュー→[ツール]→[ユーザー&アクセスプロフィール]を選択します。
2. [ユーザーアクセス権マネージャー]ウィンドウの[NetCrunch ユーザー]タブにて[追加]ボタンをクリックします。
3. 追加されたユーザーに対して、ユーザー名や通知先などを設定し、[OK]をクリックします。


レポートのデータ収集、送信先の設定について、以下に例示します。

以下の手順では例として、新たに作成した監視パックに対してレポートを追加しておりますが、ノードやマップ、自動監視パックにレポートを追加することも可能です。また、既存の監視パックを編集することも可能です。

1. メインメニュー→[監視]→[監視パック&ポリシー]を選択します。
2. [NetCrunch アラート&レポートの設定]ウィンドウの[監視パック]タブにて、[新しい監視パック]をクリックします。
3. [アラート&レポート設定の作成]ウィンドウにて、[監視パック]をクリックします。
4. [監視パックの設定]ウィンドウの[アラート&レポート]→[レポート]タブにて、[レポートの追加]をクリックします。
5. [レポート追加]ウィンドウにて、追加するレポートをダブルクリックします。
6. [監視パックの設定]ウィンドウにて、追加したレポートを右クリック→[レポートスケジュールの編集]を選択します。
※レポートを送信しない場合には、手順[8.]に進みます。
7. [レポートスケジュールの編集]ウィンドウにて、生成するタイミングの有効化やレポートの送信先を設定の上、[OK]をクリックします。
8. [監視パックの設定]ウィンドウの[割り当て]タブにて、[ノードの追加]をクリックします。
9. [ポリシーにノードの追加]ウィンドウにて、監視パックを割り当てるノードを選択し、[OK]をクリックします。
※Ctrl キーや Shift キーを利用して、ノードを複数選択することも可能です。
10. [監視パックの設定]ウィンドウにて、監視パックの名前など、必要に応じて設定します。

6.2. レポートビューア

レポートビューアでは、手動にてレポートの表示や PDF ファイルへの出力が行えます。

1. コンソールの右上にある  をクリック→[レポート]を選択します。
2. レポートビューアが起動しますので、[対象]にビュー(マップ)やノード、監視パックを選択します。
3. [期間]の右側にあるカレンダーのアイコンにて、生成するレポートの対象期間を設定します。
4. 生成したいレポートをダブルクリックします。

レポートビューアにて生成したレポートは、[名前を付けて保存]ボタンから PDF ファイルに保存することもできます。

7. 仮想パフォーマンスカウンタ

仮想パフォーマンスカウンタは、SNMP などのカウンタを用いて計算式を設定し、NetCrunch の監視に使用する機能です。定義した仮想パフォーマンスカウンタを使用することで、計算式から算出した値を収集することができます。

7.1. 仮想パフォーマンスカウンタの定義

仮想パフォーマンスカウンタを新たに定義する手順は以下のとおりです。

1. メインメニュー→[監視]→[仮想パフォーマンスカウンタ]を選択します。
2. [仮想パフォーマンスカウンタ]ウィンドウにて、[仮想カウンタの追加]をクリックします。
3. [仮想カウンタの定義]ウィンドウにて、使用する監視方法を選択の上、[次へ]をクリックします。
4. [パフォーマンスオブジェクト名]などを設定の上、[次へ]をクリックします。
5. [カウンタ式]を設定の上、[OK]をクリックします。

手順[4.]の[パフォーマンスオブジェクト名]では、定義したカウンタが参照するインスタンスに影響いたします。例えば、SNMP の「Interface 64 bits」では、デフォルトでインスタンスに「ifEntry.ifDescr」が設定されております。「Interface 64 bits」を選択して定義した仮想カウンタは、「ifEntry.ifDescr」からインスタンスを選択します。

手順[5.]では、[挿入]ボタンからカウンタを追加することができます。カウンタの追加の際にインスタンスの選択が必要な場合には、「_VCounter」を選択してください。「_VCounter」は、仮想パフォーマンスカウンタにて使用できる仮想的なインスタンスです。監視に使用する際に選択したインスタンスに、「_VCounter」の部分が置き換わります。

7.2. 仮想パフォーマンスカウンタの使用方法

定義した仮想カウンタは、「.NCVC.<パフォーマンスモニター名>.<パフォーマンスオブジェクト名>」という法則で表記されます。<パフォーマンスモニター名>には、SNMP や NT(Windows 監視)、LINUX などが表示されます。また、<パフォーマンスオブジェクト名>には、7.1 仮想パフォーマンスカウンタの定義の手順[4.]にて設定したパフォーマンスオブジェクト名が表示されます。

手順について、以下に例示します。以下の手順では、イベントやパフォーマンスビューなどでカウンタを選択する段階を想定しております。

SNMP 監視の場合：

1. [SNMP カウンタの追加]ウィンドウにて[定義済みカウンタ]を選択し、[次へ]をクリックします。
2. [ソースノード]に対象のノード、[パフォーマンスオブジェクト]に「.NCVC.SNMP.<パフォーマンスオブジェクト名>」を選択します。
3. 表示されたカウンタとインスタンスの中から監視するものを選択し、[追加]をクリックします。

OS 監視の場合：

1. [***カウンタの追加]ウィンドウにて[ソースノード]に対象のノード、[パフォーマンスオブジェクト]に「.NCVC.<OS 名>.<パフォーマンスオブジェクト名>」を選択します。
※「***」には Windows や Linux が入ります。
2. 表示されたカウンタとインスタンスの中から監視するものを選択し、[追加]をクリックします。